

《寄稿》

フィンランドを世界一に導いた 100 の社会改革

ツルネン・マルテイ (参議院議員)

母国フィンランドから素晴らしい贈り物をいただきました。フィンランドの成功の秘訣を明かす本です。その本がフィンランドで2年前に出版されて間もなく、編集者からフィンランド語版をいただいて読んでみましたが、さらに嬉しいことに、その本の日本語訳が2008年9月に出版されました。フィンランド語の原題を直訳すれば「フィンランドのソーシャル・イノベーション」となりますが、日本語版のタイトルは『フィンランドを世界一に導いた 100 の社会改革』(編集者イルッカ・タイパレ (株) 公人の友社) です。内容は、戦後フィンランドで行われた多くの改革の中から、代表的な100の改革をそれぞれの専門家が紹介するものです。100人の著者の中には国会議員、国会議長、大臣、それぞれの分野の専門家や社会的なリーダーがいます。紹介されたイノベーションのどれを見てもフィンランドのオリジナルな改革であり、決して他国を真似したものではありません。

ここでは、最初に、本の中にあるいくつかのユニークな改革を抜粋しています。そして、1つの改革について少し詳しく書くことにします。フィンランドの成功をもっと詳しく知りたい方は、ぜひ本を手に入れて読むことをお勧めしたいと思います。

女性の参政権と40%定数制度

フィンランドの女性は100年前に選挙権・被選挙権を共に獲得し、(中略)1995年より国と自治体の決定機関における男女数の定数制度が取り入

れられています。その趣旨は40%を両性が確保することで平等を保つものです。

汚職の排除・世界で最も汚職の少ない国

フィンランドがどうして汚職の排除に成功したのか、不思議に思う方も多いでしょう。(中略)客観的な要因は、以下の通りです。行政の透明性、幅広く実現している情報公開の原則、進んだ地方自治、きちんとした警察と司法制度の構造、権力の行使を自由に監視する報道陣、つまり機能している言論の自由。

スラムのないヘルシンキ市の住宅政策

フィンランドでスラム地域が発生しなかったのは、諸外国と比べても所得格差が少ないこと、北欧型福祉国家が形成されたこと、外国からの移住者が比較的少ないことなど、経済の発展に関わる要因によります。

父親休暇

フィンランドでは、育児休暇給付は現在263週日について支払われます。そのうち最初の105週日分は出産給付として母親に支払われ、出産休暇となります。残りの158週日は育児休暇となり、給付は父親または母親のどちらかに支払われます。

日常のエロティシズム・フィンランド人の性生活

性生活における平等性は明らかです。1990年代にはほとんどすべてのフィンランド人が、女性も

男性と同じように性的関係のイニシアチブを取る権利があると考えています。

このように、ユニークな改革がたくさん紹介されているのですが、本の中で一番紹介したいことは、「カリヤラ住民の引き揚げ事業」です。このあまり知られていない大事業について、本文から一部抜粋しながら事業の概要を紹介します。

※ カリヤラ住民の引き揚げ事業

フィンランドとソ連の間の冬戦争と継続戦争後の平和条約（1944年）によって、フィンランドはヴィープリ県をソ連に割譲し、そのカリヤラ人住民のフィンランド領土への集団引き揚げを行いました。フィンランドは領土の10%を失い、44万人のカリヤラ人が家屋と財産を残して引き揚げました。当時のフィンランド人口は約400万人だったので、1割以上に当たる大規模な住民移動でした。この事業はフィンランド国内においても世界レベルにおいても大規模なものとなりましたが、世界でこのような事業を実施した国はありません。

フィンランド議会ではこの事業を行うためにいくつかの新しい法律が制定されました。それらによって、フィンランドの自治体と教会、民間農家に、土地を国に寄付することを義務付けました。そして寄付された土地が土地を失ったカリヤラ人に与えられました。新しい土地に家ができるまでの間、近くの隣人が世話することも義務付けられました。たとえば、部屋が3つ以上ある家では1つの部屋を移住者に貸すことが要求され、当然ながらいろいろな摩擦が起きました。カリヤラ人は新しい環境、隣人、文化になかなか慣れることができなかった上に、“ロシア”人という悪口、学校でのいじめ、新しい移住者に対する偏見などが長く続きました。それでも、国の強いリーダーシップのもとでこの大事業が成し遂げられたのは、フ

インランドならではであったといえます。

日本ではこのような政策が果してあり得るでしょうか。たとえば、いつか起こりうる「関東大地震」によって数100万人の人が家を失うことになれば、仮設住宅や避難所だけでは到底すべての人に臨時の住まいを提供するのは不可能なはずで、そのような大災害の際に、ここで紹介したようなフィンランドのモデルが少しでも参考になればと私は考えるのです。

いずれにしても、フィンランドから学ぶことは決して教育政策だけではありません。社会のあらゆる分野において、フィンランドの改革の精神が大いに参考になると思います。そして、それらをそのまま日本に取り入れるのではなく、日本人特有の創意工夫によって様々なイノベーションとして取り入れるとよいと思います。私もフィンランド生まれの日本人として、その運動に引き続き参加したいと思うのです。

私はすでに40年間もフィンランドを離れていますが、フィンランドの社会の現在の姿を総合的に理解することが段々難しくなってきました。里帰りを時々しますが、フィンランドで滞在する時間が数週間しかないので、フィンランドの実態を十分に把握できないのが事実です。ですから、ここで紹介したこの本は、私にとっても本当に素晴らしい出会いでした。フィンランドの成功の秘訣がこの本には非常に分かりやすく示されています。残念ながらこのような短い記事ではその本の一部しか紹介できませんので、皆さまもぜひこの本を手に入れて読んでみてください。そして多くの日本人にも紹介してください。

※ カリヤラ：カレリアのフィンランド語